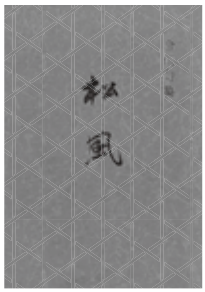
vol.289

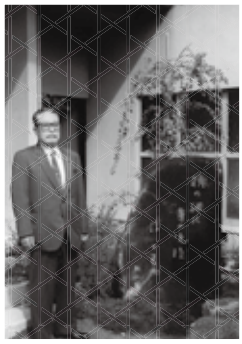
藤本家住宅と俳人・藤本新松子（下）

西田 孝司（松原市文化財保護審議会）

▲「赤楊の木」458号（令和3年6月）新松子の死後、熊田俠邨・宮城梵史朗の各氏が主宰されている。昭和27年に第1号を出した。



▲添水（新松子）書の藤本家木札「無貴仁奈縷那」と、「松風」表紙（柴垣1丁目・三田嘉重子氏蔵）



▲宗圓寺に建つ新松子句碑と新松子（大阪市天王寺区、平成6年。藤本鈴子氏蔵）

▲司馬遼太郎の直木賞受賞祝賀会（昭和36年、上宮学園）前列右に坐る司馬。新松子は後列左から4人目（南新町2丁目・藤本鈴子氏蔵）

同窓・司馬遼太郎との交流 書の雅号「添水」の生き方

藤本新松子（暉昌）は、昭和三十一年（一九五六）、大阪の小金まさ魚が主宰する俳句結社「赤楊の木」の同人となりました。以後、多くの作品を発表しながら、地元松原の人々に俳句の楽しさを教えたり、大阪や関西に広がる俳人協会や俳誌に関わり、選者・講師などとして多くの人々と交流したのです。

旧制上宮中学校（現上宮学園）で同窓であった国民的作家の司馬遼太郎とも、親しく話し合える間柄でした。司馬は大正十二年（一九二三）生まれで、大正八年（一九一九）生まれの新松子とは四つ違いでした。司馬は昭和三十五年（一九六〇）、「梟の城」で第四十二回直木賞を受賞しました。上宮学園同窓会は、同賞受賞を祝う会を翌三十六年、学園会議室で行いました。当時、新松子は同窓会副会長として、奔走したのです。

新松子は、「土壌」（昭和四十七年）、「晩鐘」（平成四年）、「歸命」（平成十四年）の三冊の句集を出しています。そのうち、「晩鐘」に寄せて、司馬は、「晩鐘」よき句ばかりで、どの句にも生きものを感じました。ときに閃くような人の肢態、ときにイモムシの蠕動、蝶の腹のぷっくりとした感触。〈いとけなき 母の紅絹 裏鳥雲に〉に幼児の頃の母君と死別された思い。〈粉ぐすりの きらら混りの 梅三分〉にも生物のぬめりがあり……。と、新松子への私信の中で述べています。

昭和五十七年（一九八〇）、新松子はまさ魚の後を継ぎ、「赤楊の木」の主宰となりました。この頃には母校上宮学園に役員として奉職しており、教職員らと共に定期的に句会も持たれていました。布忍の自宅「連翹居」でも多くの同人が集まり、俳句サロンの様相を呈していたのです。その折、新松子が終戦後、インドネシアに抑留中、歌手藤山一郎に詞を与えた「ふるさといかに ふるさとおもう」を家人のピアノにあわせて独唱していたと、ゆかりの人々からうかがいました（「松原歴史ウォーク」288）。

新松子の作品を記念して、二カ所に句碑が建立されています。一つは、浄土真宗本願寺派の常宣寺（大阪市旭区生江）にあります。「くわんおんの母を根榾の けむの中」です。寺で生まれ、生後半歳で母を亡くした作者の母を慕う気持ちが表されています。

また一つは、浄土宗・宗圓寺（大阪市天王寺区城南寺町）に建っています。「臍の緒の 寺の晩鐘 浮いてこい」です。母を亡くした幼な子の新松子を僧衣の袖にくるんで、貰い乳に廻った父を詠んでいます。

ところで、松原地域は江戸時代以降、多くの俳人を輩出してきた土地柄です。新松子は、その伝統を受け継ぎ、昭和四十三年（一九六八）に発足した松原市俳句人連盟の発起人・講師として、松原の俳句会を盛り上げてきました。平成十年（一九九八）には、それぞれの所属結社の垣根を越えて、松原の俳人たちの句集「松風」が上梓されました。新松子は、書家としても著名で、添水の雅号を用いました。「松風」の表紙題字は、添水（新松子）の書です。

私は、俳句連盟が所属する松原市文化連盟の歴史関係団体に関わっていましたので、度々、新松子さんに声をかけていただきました。一見すると体格のいい威厳のある強面の印象を受けますが、親しくなるにつれ、ユーモアあふれる優しい人でした。門前の檀那寺である称名寺（浄土真宗本願寺派）の木南康昭住職が話してくれました。月参りの時、「俳句は思ったことを何でも口にすれば良い。『起きなはれ 起きたら 布団をあげなはれ』これで一つ完成や」と教えられたと述懐されておられます。

藤本家脇玄関に、添水書の木札が掲げられています。「無貴仁奈縷那」とあります。「むきになるな」と読みます。昭和四十三年十月に献刻されたものです。水の流れのままに、悠悠自適に過ごそうとした新松子の人生訓であったと思います。

新松子は、平成十五年（二〇〇三）七月、八十五歳の生涯を閉じました。法名「添水院釋暉昌」の墓が自宅庭に祀られています。